

上野の杜の 波瀾万丈

第三回

美校の経営戦略・ 依嘱製作事業

岡倉天心校長の経営戦略に端を発して
第二次大戦中まで続いた依嘱製作事業は
美校の実力と有用性を世に示すことになった。

吉田千鶴子

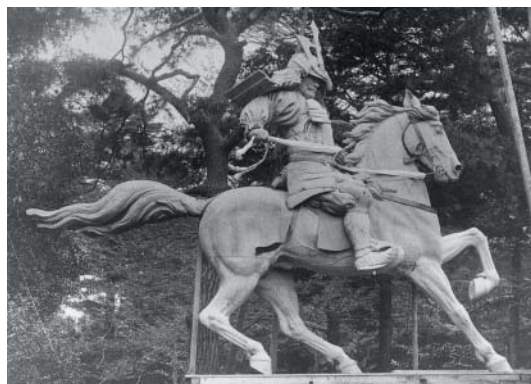
芸大の経営が苦しいことを聞くにつけ、思い起こされるのは草創期の東京美術学校（美術学部の前身。美校）だ。遠大な理想を掲げて発足はしたが、政府から支給された予算は計上予算の十分の一以下。そのため岡倉覺三（天心）校長がとった措置は依嘱製作事業の推進であった。明治二十五（一八九二）年を例にとると、歳入約四万円（うち政府支出金二万二千円余）のなかの依嘱製作収入は一万四千五百円余で、約三六パーセントを占める。美術という特殊な分野の学校であることから、このような特別会計が容認されたのであろう。

教室で生徒に教えることのほかに実験製作によって世の模範となるような優れた製品を作り、製作過程を生徒に見学させたり手伝わたりする必要があるというのが天心の考えであった。その実験製作費も本来は国が支給すべきだが認められない。そこで一般からの依頼を受けて製作を行なうことにしたのである。文部省に伺いも立てず、特に規則など設けずに事業を開始したらしい。何といっても第一着手が国家的記念像である楠木正成の大銅像であり、それは住友財閥の資金と飛ぶ鳥を落とす勢いの顯官九鬼隆一の斡旋による皇室献上品の製作であったから、文部省の認諾に係なく校長の一存でことは決したようだ。

いかに名人を集めて指導組織を作ろうとも、教育成果が現れるのは十数年後のことである。常識どおりのことをしていたのでは理想の実現はもとより美術学校というものが社会に認知されるのもむずかしい。現に

東京音楽学校は美校と一緒に独立した学校として設置されながら、芸術に理解のない政府によって高等師範学校の附属にされてしまった。そうしたことを避けるには奇策を弄してでも早く実績を示すに如くはない。そういう考えもあって実施したのが企画展覧会や講演会、そして依嘱製作だったと思われる。

開校後まだ一年足らずの明治二十二年十二月、住友家から楠木正成銅像の製作依頼を受けた美校では直ちに準備を始め、二十四年四月に彫刻科教員高村光雲を木型製作主任とし、新規採用の後藤貞行、山田鬼斎、石川光明に同担任を、同じく岡崎雪声に鑄造担任を命じた。後藤は馬の彫刻の専門家で、木彫を光雲に習った人。日本の木彫家、鑄造家の腕で西洋の銅像に負けない優れたものが作れることを世に示すチャンスだとばかり一同奮い立ったものの、日本ではそのような大きな騎馬銅像は前代未聞であり、しかもみな大きな彫像の経験などない。そこで校長の指揮のもと、研究に研究を重ね、学科教員も時代考証等に尽力し、鬼斎がまず木彫雛形（大学美術館に写真が残る）を製作。それを原寸大に引き伸ばし、伝統木彫の技を駆使して白木の美しい原型を完成させたのが二十六年三月。それを皇居に運搬して天皇に御覧頂き、美校に戻して一般公開したのち雪声が鑄造に着手。雪声はわざわざ渡米して分解鑄造法を学び、それと日本古来の技法を用いて二十九年九月に鑄造を完成させた。皇居前の現在地に建立されたのは岡倉校長辞職後の明治三十三年七月であったが、国の中心地に登場したこの銅像は、美校



「楠木正成銅像木型」明治26年（大学美術館所蔵写真）

教官各人の能力が共同製作というかたちで十二分に発揮され、世の期待に沿う出来栄のものとなった。なお、このとき作られた木型製作場はその後も転用されて長く使用され、鑄造工場も鑄造科の授業や依嘱製作に盛んに利用された。

楠木正成銅像に次いで着手したのは帝国博物館美術部（部長天心）の依頼による模写・模刻（五か年計画）で、横山大観ら上級の生徒が古画を模写し、竹内久一、山田鬼斎ら教官が奈良で仏像の名作を模刻して博物館に納めた。それとともに松方伯銅像、知恩院観音銅像

シカゴ万博出品工芸品などの製作を受託し、翌二十五年には二度目の国家的記念像である上野の西郷隆盛銅像を受託。光雲、貞行、林美雲、雪声らが共同製作を行うことになり、紆余曲折を経て像姿を決定、明治三十年春に漸く木型が完成し、雪声の鑄造をへて三十一年五月に現在地に建立された。同じく二十五年にはシカゴ万博のバビロン鳳凰殿の設計と室内装飾を受託して全校あげて取り組み、図案教育に役立て、また、博多の日蓮上人の大銅像を受託して竹内久一に担当させ、二十七年にはアメリカ人富豪の室内装飾の依頼にも応じ、その他川田男爵銅像、刀剣、花瓶、盃、置物、香炉、銅碑等々の製作を受託。三十年には博物館の庭にあるジェンナー銅像を製作し、同年公布の古社寺保存法の適用第一号として中尊寺金色堂修繕を行なうな



昭和6年5月7日、正木校長自ら背中に「漆」の字を書き印を捺した法被を着て、一同明治神宮に議事室内漆塗り成就祈願（磯矢阿伎良旧蔵写真）



「国際こども図書館鏡板」帝国図書館建設に際して明治37年に製作を依頼され、津田信夫が中心となり鑄造科で製作

ど、活発な事業を展開した。

正木直彦校長時代（明治三十四年～昭和七年）にはこの事業に一層熱が入り、製品の種類も増えた。大掛かりなものでは仙台昭忠銅標、第五回内国勲業博覧会各種噴水器、浅草公園噴水器、日比谷公園噴水器・アーク電灯柱、屏風「精華」「綵観」、帝国図書館銅製鏡板、下谷凱旋門装飾、掛川戦勝観音銅像、長岡護全騎馬銅像、献上品飾り棚・書棚・衝立・花瓶・香炉・鼎・絵巻・画帖・置物・時計、東京勲業博覧会会場彫刻、大阪図書館記文銅板、仙台広瀬橋高欄、改築日本橋上部青銅製電灯柱（獅子、麒麟ほか）、中央停車場（東京駅）壁画、戦艦河内の楠公坐像、佐竹侯爵銅像、御紋付梨子地太刀掛、ホノルル鳳凰噴水塔、即位御剣、議院本館ブロンズ扉製作・館内の漆塗りなどがあり、ほかに石膏像複製、メダル、印刷物などの量産品も盛んに作られた。岡倉校長時代と異なるのは献上品製作が増加し、その多くは校外の名工たちとの共同による美術工芸品製作であることだ。価格・技術面で信用度が高かったことにより非常に多くの製作依頼があり、そのため図案だけ立てて製作は校外の業者に委ねてしまいうことも多く、本来の実験製作の意味を失い、単なる請負製作となる傾向が生じた。

岡倉校長の経営戦略に端を発して第二次大戦中まで続いたこの依頼製作は、主たるものだけでも約四六〇件に上る。この事業のお蔭で教官は研究の機会を得、生徒は実地の勉強ができ、卒業生は仕事を与えられ、そして美校の実力と有用性が世に示された。しかし、問題がなかったわけではない。岡倉校長時代にはこの事業によって美校の鑄造が隆盛に赴くにつれ、民間の鑄造業者たちが美校に需要を独占されるとして反発し、新聞紙面を賑わした。岡倉校長排斥運動の首謀者が配布した例の怪文書にも「収益を以て私を営み」云々としてこの事業が槍玉に挙げられている。名校長正木直

彦もこの事業に関連して批判された。大正五年、美校当局の風紀肅正に対する生徒の反発をきっかけに、前年辞職した岩村透を中心とする美校改革運動が盛り上がり、大波乱を巻き起こしたのであるが、その際に国民美術協会が美校に突きつけた改革案は「生徒の実験を主要の目的とすべき公私の依頼製作は本来の趣旨を失して生徒見学の便乏しく、動（やや）もすれば単に製作請負に類したる形式に陥り依頼の認諾、金銭の授受等に関し公私を混同せる形式ありて弊害茲に発するもの鮮（すくな）からず」と指弾した。また、そうした非難に対処する意味で厳格な会計検査が行なわれ、その結果、依頼製作の経理に不当な処理が見つかり、校長は譴責、会計主任は懲戒減俸の処分を受けた。気の毒なことに、この会計主任はそれが原因で神経を病み辞職している。正木校長はそれを機に依頼製作事業を全廃すると公言したものの、当時は御大札関連の各種の製作が続行していた上、その後も献上品を中心とする製作依頼が続々と寄せられたため廃止はできず、結局、主要な製品は完成後必ず校内に展示して生徒や一般に見せるなどの配慮をし、事業を推進することにしたのであった。

依頼製作品のうち、銅像などは戦時中の供出で多くが失われたが、これまでの調査によると現存しているものも少なくないようだ。また、製作に関する記録文書や写真が本学に多数残されている。それらに基づいて、遠からずこの事業の全容を紹介したいと思っている。「」の引用文の原文送り仮名は片仮名

（よしだ・ちづこ／学史編集担当）

次号予告

歌劇「オルフォイス」上演
明治二十六年七月、東京音楽学校奏楽堂において歌劇「オルフォイス」が上演された。日本人による最初のオペラ上演である。再演計画もあったが、風紀問題等により中止された。それから五十三年後の昭和三十一年四月（「椿姫」上演で音楽学部がオペラが復活、平成十八年に第五十二回を迎えた「藝大オペラ定期」の第一回となる）。